ゲイジュツメイカーズ

工藤 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲイジュツメイカーズ

【Ｎコード】
Ｎ６４００Ｆ

【作者名】
工藤　円

【あらすじ】
運命が二人を引き寄せる！全世界、森羅万象巻き込んで、二人の天才が“芸術”を生み出す！

第1話「運命の告白」

――春原墨也（はるはらすみや）、１４歳。中学二年生。文芸部所属、将来の夢は小説家。

本当は漫画家になりたかったのだけど、絵がド下手なのは仕方がない。今は小説家になる為、執筆を繰り返す日々。

でも文章を書き続けるだけの日々というものは、健全な中学生にとっては少し色気が足りない。そんな僕の唯一の華――それが一つ上の先輩、栗山梨穂子（くりやまりほこ）さんだ。

伸ばせば背中辺りまであるであろう、ド真っ直ぐな黒髪。それを頭の上で纏めている髪型は、とても魅力的だ。

正直、学年も違うし恥ずかしいし、正面からはっきりと栗山さんの顔を見た事は無いのだが、美人である事は分かる。

目元に出来た黒いクマは神秘的な美しさを醸し出し、アンニュイで嫌疑的なその目つきは彼女独特の魅力を表現する。僕にとって、彼女は最高に美しい。

――でもそれより何より、僕が彼女に惹かれた最たる理由ははその“画力”だった。

プロかと見紛う様な、完璧な色遣い。彼女の内なる性格が前面に押し出された、魅力的な画風。

一度、漫画研究部の同級生に栗山さんが描いたイラストを一目見せてもらってから、僕はイラストレイターとしての彼女にも夢中になっていた。

彼女が――、愛しい。

そしてある日、そろそろ我慢し切れなくなってきたその愛情と確

固たる決心を秘め、僕は彼女に告白する事を決意した。

第1話「運命の告白」

終業のチャイムを合図に、僕は教室を飛び出る。誰よりも早く玄関に辿り着き、栗山さんが来るのを待つ。

すると、五分と待たずに栗山さんがやってきた。

（おお……。やっぱ、放課後は教室でダラダラ喋ってないで直帰……。ストイックで可愛い）

友達と一緒だったのが残念だけど、とりあえず僕も外靴に履き替え、チャンスを窺う為栗山さん達の後に続いた。

つかず、離れず。絶対にこちらに気付かれない様な絶妙な距離を取りながら、僕はただ栗山さんの足跡を辿る。

暫く、彼女はずっと友達と並んで歩いていた。

（くそ～、早く別れろよ！）

僕はまどろっこしくて地団駄を踏む。それに気付いた訳では無いだろうが、彼女は友達と別れた。

（！　チャンス！）

僕は一気に彼女との距離を縮め、その距離は四～五メートルとなる。

（告白！　告白！！　何が何でも告白！　告白！！）

未だかつてない程に激しさを増す鼓動。初めての経験故、本当にはち切れてしまうのでは無いのかと心配になるぐらい心臓が締め付けられていた。

（うわっ……！　告白ってこんなに緊張するもんだったのか……！？）

今まで、小説内での告白シーンを少し軽率に書きすぎていた。何故かは分からないが、過去の登場人物達に心の中で謝った。

――そんな、話題をはぐらかすかの様に頭の中でどうでも良いやりとりを繰り返していると、栗山さんが道を曲がる。
（！　やば……急がないと！！）
その通りに信号があるという訳ではなく、マンションとマンションに挟まれた路地。僕は、この通りに彼女が家があるのだという事を理解した。
時間が無い。告白は今日中にしてしまいたい。僕は彼女との距離を更に縮め、彼女の背中へと声を掛けた。

「栗山さん」

「……」
……。
栗山さんは、こちらを振り返る事なく歩き続ける。
（！？）
身に覚えの無いシカト。しかしともかく、ここで引き返す訳にはいかなかった。
「あ、あの……栗山さん？」
「……」
彼女は、振り返らない。
（なっ、なんだよ！　どうなってんの！？）
彼女はもう一度方向転換するとマンションの門を潜り、二枚ある自動ドアの一枚目を開いた。
（……！！）
僕は流石に、自動ドアの外でその様子を眺める。
栗山さんがインターホンのボタンを押すと女性（恐らく母声）の声に応対され、二枚目の自動ドアが開いた。
二枚目のドアを通るにはインターホンを介す必要があり、僕は栗山さんと同じタイミングでそれを通り抜ける他無い。
僕は咄嗟に、反射的に一枚目の自動ドアを潜り、そのまま二枚目

の自動ドアも通り抜けてしまった。
それでも、栗山さんはこちらに気がつく事は無く。入ってすぐ右に曲がり、その奥の扉へと手を掛けた。

「栗山さん！！！」

気が付けば、僕の叫び声が廊下中に響き渡っていた。
流石にこれには彼女も気が付く。開きかけた扉を元に戻し、こちらを振り返る。
――彼女は、両耳のイヤホンを外した。
シカトされていた訳では無かったという安堵感と妙な疲労感とが心の中で混じり合う。
「え、えっ……。誰……？」
突然の訪問者に相対し、咄嗟に出る怯えた仕草。申し訳無いながらも、僕はそれを可愛らしく思っていた。
「あっ、いや、ちょっとお話があるって言うか……」
「は、話……？」
明らかな嫌悪感と、懐疑的が視線が俺を締める。
「いやっ、怪しい者じゃないです！　マジで！！」
僕は間抜けなセールスマンかの様に、両手で友好的である事を表現する。
（……）
その時、栗山さんの家の扉が開いた。
「！！」
「ちょっと、何……？」
少し掠れた声と、皺の出た肌。
（！！　お母さん！？）
「あっ、お母さん……。いや、ちょっと……」
栗山さんは後ろを振り返り、母親に何か耳打ちした。
「いやっ、ほんと怪しい者じゃないです！　僕、栗山さんの後輩で

……」

「後輩？」

それを聞いて、栗山さんの表情が一瞬緩む。

「知ってる人？」

母の質問に、栗山さんは首を横に振る。

「えっと、栗山さんは知らない筈って言うか……でも、僕後輩です！　これホント！」

もはや、何を言っているのか訳が分からない。

僕も、流石にいきなり母と対面するとは一ミリも考えていなかったので、頭の中が真っ白になっている。

「……じゃ、じゃあ、一応話だけでも聞いてあげたら……」

母が渋々そう言うと、何か二人の視線の間でやり取りが行われ、母は扉を閉じた。

（魔王退散！）

「……えっと、何ですか？」

頭の中でＲＰＧのグラフィックを思い描いていた隙に、彼女に先に口を開かれた。

「ああ。えっと、いきなりすいません。本当に」

僕は、一歩二歩と歩み寄り、彼女との距離を最大限縮めた。

（……よし、告るぞ！！　告る！）

自分で自分を鼓舞する心の掛け声。

しかし、いざ――と気合を入れた時、俺はふと違和感に気が付いた。

（えっ……？　何、これ……？）

目元のクマ。手も足も、不健康な程に細い。嫌疑的な目つきは相変わらずで、頬にはニキビ等の発疹が出ていた。

（……。マジ？）

そして俺は、気がついてしまう。

――もしかして栗山さんって、あんまり可愛くない？

長い年月を経る内に、何重にも何重にも美化されていたその容姿。
栗山さんの持つその独特な雰囲気と髪型が僕にとって好ましいという事もあり、僕の記憶の中で想像以上に彼女は美化されていたのだ。
「……えっと、何ですか……？」
ふと、我に返る。誰もいない廊下で二人きり、恐らくドアの覗き穴からは母がこちらの様子を窺っているだろう。
（！！　えっ……何これ？　何この状況？　僕、告るの？）
冷や汗が、頬を伝う。
（いや……今ならまだ、“間違えました”で何とか済むかも……）
幾らなんでも失礼すぎる。却下。
（お母様にも見られちゃったし……、何にも無しで帰る訳には……！）
滝の様に流れる汗。唇が乾き、視界が揺れる。
「あ、あの……。どうしたんですか？」
――朦朧と、朦朧と。ぼやける思考の中で、僕は、遂に口を開いた。
「僕の書いてる小説の、作画を担当してください！！」
――――。
……？　何？　今僕何て言った？
頭の中が、真っ白になる。
（初対面で、いきなり小説の作画って……！！）
僕はすっかり蒼褪め、左右の黒目が右往左往する。
しかし栗山さんは相対的に、声のトーンを弾ませた。
「素敵！　君が原作を書いて、私がその漫画を描く！　そういう事！？」

「えっ？　えっ……ええ、そうです、そうです」
「私、漫画研究部なの！　君は？」
「……。文芸部です。一応」
僕はこくりと頷いた。
「うわあ！　じゃあ、専門家じゃない！　私一応漫画家を目指してるんだけど、話を作るのが苦手で……。誰か原作を書いてくれる人がいないかなって、むしろ探してたの！」
目元のクマを吹き飛ばす程、輝く瞳。
「……」
「よろしくね！　一緒に頑張りましょ？」
栗山さんは俺の両手をとり、首を傾げて微笑んだ。
「――――！」
それがどうにも、可愛くて。それはやっぱり、俺の理想の栗山さんで。
「はい……。何卒、よろしくお願い致します」

第2話「才能の隆起」

栗山さんに漫画の作画を担当してもらう約束をとりつけた翌日。
僕は文芸部の机に向かっていた。
「なんか、今日春原の奴気合い入ってるね」
「だな」
文芸部部長の杉長さんと、三年女子の持岡さんがはっきりと分かるくらい、この日の僕は燃えていた。
――それもその筈。一応は約束してくれたとは言え、栗山さんは僕の作品を読んだ事など無い。一度読んでもらってみて、もしもそれが酷ければ栗山さんはあっさりと作画を降りるだろう。

第2話「才能の隆起」

激しく滑るシャープペンシル、真っ黒になった右手。僕は、凄いペースで原稿用紙を埋めていく。
「お……おい春原、少し落ち着けよ」
「はい。ありがとうございます」
杉長さんの声も、耳には入っても頭にまでは届かない。僕はシャーペンの動きを緩める事は無かった。
「……聞こえてないな」
「みたいね」
――今僕が書いているのは、“週間交際”という恋愛小説。
内気で弱気な男子高校生、山内透はかれこれ五年以上も一人の先輩、砂本美雪に恋心を抱いている。
とある冬の日、大学受験を控えた美雪に“最後のチャンス”とし

て告白する透だが、過去に恋愛事で心に傷を負った事のある先輩の答えは“私にとって、付き合うというのは重大なこと。もし仮にこの場で私が君に一目惚れしたとしても、お互いどんな人間か分からない内から付き合うという事は絶対にあり得ません”。

これで、長年の片想いが終わる。美雪は大学受験に専念し、透は新たな恋を見つけ出す。

『それは絶対に嫌だ』――。透の出した答えは、“暫く普通の先輩後輩として付き合って下さい。その上で、僕がどんな人か判断して下さい”。内気な透が、一生分の勇気を振り絞って出した条件だ。

しかし、大学受験を控えている美雪はそこまで時間に余裕がある訳ではない。そこで美雪の出した条件が、“一週間、試しに彼女になりましょう。その上で、本当に付き合うかどうか考えます”。

こうして、透と美雪の一週間限定交際が始まった。

――という、二人の一週間を描く小説。

程よく文芸向きで、程よくライト。僕は正直、少しこの作品に手応えを感じていた。

「……持岡お前、春原の小説読んだ事あるか？」

「何度か」

「どう思う」

「……う～ん。もうひとつ」

持岡は人差し指を唇に当てた。

「俺もそう思う。恐らくそれなりにセンスはあるんだろうが、いかんせん全体的に荒すぎる。展開が単調になってしまいがちだし、何より文法的な粗さがまだまだ目立つ。――まあ文章力については、奴の集中力の無さが原因ぽいが……」

杉長は物惜しそうに溜息をついた。

「できた！！」

僕は完成原稿を掲げた。それとほぼ同時に、斜め前に座っていた部員、前川も椅子を立つ。
「僕も出来ました」
「お。見せてみろ」
杉長さんが右手で手招きし、僕と前川は杉長さんの所へと原稿を持って行く。
「お疲れ」
僕らは杉長さんに原稿を手渡すと、元の席へと戻る。
「……」
（……正直、これが一番キツイんだよなあ～）
杉長さんに作品を読まれるのは、とても緊張する。眼鏡の奥の鋭い瞳、今にも罵声が飛んできそうな口元。僕は、手に汗を握りながら杉長さんの評価を待った。
――五分程して、杉長さんが片方の原稿を掲げる。
「おい春原～。お前これ、前言った事全然直ってねーじゃねーか。文章は荒いし、話の作りも甘すぎる」
「え、ええ？」
僕は、思わず立ち上がった。
（……そんな。今回は自信があったのに……）
「お前はまだまだだな」
杉長さんは続きのページに目を通しながらそう言った。恐らくまだ途中なのだろう。にも関わらずこんな事を言われるというのは、序盤を読んだだけで相当酷い出来だという事だ。
「……」
一気に執筆した疲れと、自分なりに自信のあった作品を悪く言われたショックで僕は鞄を持ち上げた。
「すいません、今日はとりあえず上がります」
「おう。今回はお前気合い入ってたからな。帰って休め。まあ見所が無い訳でもないし、次回また頑張れ。とりあえずちゃんとした評価は明日話すから」

「はい」
僕は杉長さんの目を見ずに返事をして、文芸部を出た。

「は～……、正直ショック」
家。僕はベッドに体を投げた。
（……あの栗山さんに作画をしてもらうんだから、僕が足を引っ張る訳にはいかない……。栗山さん自身も、漫画家になりたいんだ）
「……」
気が付けば、右手に力が入っていた。
「くそーっ！！　とにかく書くのみ！！　打倒杉長部長！！」
僕はベッドから飛び降り、机に向かった。

＊＊＊

「……これ、凄く良いんじゃない？」
夜七時、文芸部室。持岡は感心した様に唸った。
「おお、前川の作品か。あいつも最近イマイチだと思ってたが、今回は頑張ったな。今までと比べて格段に良くなってる」
杉長も嬉しそうに原稿を眺める。
「いや、これ良いわよ……本当に。私も負けてらんないわ」
「まったくその通りだぞ。お前、前回の作品展の結果酷かったからな」
「う……」
持川は気まずそうに視線を逸らした。
「お疲れでーす」
前川が杉長の前を通り、部室から出ようとする。
「お、前川待て。これ読んだから、持って帰れ」

「あっ、ありがとうございます」
「凄く良かったぞ。この調子で頑張れ。お前も、詳しい話や推敲は明日するからこの原稿また明日持ってこいよ」
そう言って杉長は原稿を手渡した。
「はい」
「あ……でもお前、なんか字下手になったか？」
「はい？」
前川の身に覚えは無く、聞き返した。
「いや……なんか今回随分字が荒れてたからな。まあ、どうせ後で清書するから良いんだが」
「はあ……」
前川は困った様に原稿用紙をパラパラと捲った。
「あ」
「どうした？」

「これ……多分春原の原稿ですよ。部長に渡す時に入れ替わったんじゃないですか？」

杉長と持岡は、お互いの目を見合った。
「それにしても……アイツ今回そんなに良かったんですか？　俺も読んでみたいんで、今日これ家に持って帰っても良いですか？」
――杉長と持岡は、原稿を渡されてからの会話や出来事を何度も何度も振り返っていた。

第3話「構成力とストーリー」

翌日――。俺は杉長さんから昨日の事の顛末を聞き、正しい評価をしてもらった。

ウチの文芸部では、完成した作品は部長らを中心に色々な観点から五段階評価を付けられる。顧問の先生は殆ど部に顔を出さないので、その役割は専ら杉長さん、持岡さん、岸和さんらが請け負っている。

今回の僕の作品“週間交際”には、ストーリー、独創性、文章力など高評価の“４”がついた。

（やった！）

僕は、評価の紙を見ながら鼻高々に笑った。この評価方式は五段階評価と銘打ってはいるが、“５”がつくというのは“それ以上無い”という事で、それは杉長さんの指導方針に反するらしく、僕らが実際に目にするのはほとんどが“４”までだ。つまり、今回のこの僕の評価はかなり高い位置にいるという事になる。

僕は新たな原稿用紙に向かい、気分良くシャープペンシルを動かした。

「そう言えば春原、お前コンクールに出展するよな？　あとお前だけなんだが」

杉長さんが右手のパンフレットをパタパタと叩きながら言った。

（ああ、もうそんな時期か）

“全国中学校文芸コンクール”。小説家を志す者ならば誰もがその大賞を夢に見る、中学生文芸の一大コンクールだ。僕らの部活でも、皆このコンクールを目標に日々切磋琢磨している。

（微妙なんだよなー……。僕は文芸部員って言っても漫画家志望だし、そんなガチガチに文芸向きの作品書いてもなあ）

漫画の原作用に書いた作品と文芸コンクールに出展する様な作品とでは、趣が大きく変わってくる。僕は少し迷った。

「……まあ、まだ時間はあるしゆっくり考えとけ。なんならコレを清書して投稿しても良いしな」
「はい」
杉長さんは、“週間交際”の原稿をヒラヒラとなびかせてそう言った。

第3話「構成力とストーリー」

――栗山さんに作画を担当してもらうとあっては、時間はいくらあっても足りない。その週の土曜日、僕は図書館にやってきた。
高い天井まで吹き抜けた広々とした空間、雑音の無い静かな空気。作品を書くには最適だ。僕は数冊の小説と原稿用紙を持ち、空いている椅子に座った。
――高く積み上げられた本、何十枚という原稿用紙。斜め前の椅子に座った男は、僕と同じ様に原稿用紙に向かっていた。
「――――――」
思わず眺めてしまっていると、男はこちらに気付き目が合った。
「あっ……き、君も、小説書いてるの？」
僕は自分の原稿用紙を指差して言った。
「うん。キミも？」
その男は明るく微笑んだ。整った顔立ち、真っ直ぐな髪の毛。鋭い瞳も、笑った時には優しさを帯びる。
「うん。――って、あれ？　それ漫画？」
僕は、目の前に積みあがった本を指差した。
「ああ、そうだよ。僕、将来は漫画家を目指してるんだ」
「えっ、ほんと！？」
思わず声が大きくなる。男は驚いた様に目を丸くした。
「う……、うん」

「僕もだよ！　僕も、漫画家を目指してるんだ」
「えっ！？」
男も自然と声が大きくなった。
「うわーっ、奇遇だなあ！　じゃあ、キミもコンクールに向けて？」
「あっ……いや、多分僕はコンクールには出さないんだけど」
「そうなの？　なんで？」
「なんでって……やっぱり、漫画って“ストーリー”と“絵”じゃん。小説を書く練習の場として文芸部には入ってるけど、文芸作品にはあまり興味無いんだよなあ。漫画家目指すにはあんま必要無いし」
それを聞いて、彼は笑った。
「そんな事ないよ？　ちょっと、これ見てみて」
積み上がった漫画の一番下から一冊を取り出す。
「何コレ。『赤い白井さん』？」
「うん。砂木って人の作品で、結構人気あるんだけど」
「ふーん……」
僕はパラパラとページを捲った。
「コミックスの売上げも良いし、連載してる雑誌では人気もかなり上の方にある。……だけどその漫画、他と比べてストーリーが抜き ん出てるとは思えないんだ」
「え？」
「ちょっと読んでみてもらうと分かるんだけど、別に主人公が個性的な訳でもなく、派手なストーリー展開がある訳でもない。言い方は悪いけど、多分相当地味な話だよ」
「えっ……でも、人気あるんだよね」
「そう……。話も画力も平坦だけど、その作者、話の構成と展開力がズバ抜けてるんだ。多分、ボクがこれまでに読んだ漫画の中じゃダントツ。結論だけ聞けば何て事無い様な話も、その作者の手に掛かれば魔法の様に面白くなってしまう。だからこうやって、ボクも必死で参考にしようとしてるんだけど」

積み上がった漫画に目をやって、気恥ずかしそうに笑った。どうやら、これが全部『赤い白井さん』らしい。

「つまり……、“普通の話”も展開力と構成力次第で“面白い話”になるんだ。ならもしも自分がしっかりとした展開力と構成力を持ってれば、“面白い話”は“物凄く面白い話”になる……。そう思わない？」

僕の目から、鱗が落ちた。

「うおーっ！！　それ、それスゴイよ！！　君の言う通りだ！　うわーっ、構成バンザーイ！！」

僕は両手を上げて騒いだ。

「うるせーぞバカヤロー！！」

少し離れた所に座っている男の人に怒鳴られた。僕達は声量を極端に下げ、顔を寄せ合った。

「僕……文芸コンクールに出る！　それで、ゼッタイ大賞をとる！」

「ハハッ、ほんと？　ボクも負けてられないな」

その男は爽やかに笑った。

「僕は春原墨也。君は？」

「一条新歩（いちじょうにいほ）。よろしく」

「よろしく！」

そしてその日、僕と一条は日が暮れるまで作品を書き続けた。

第４話「鋭気隆々」

図書館に通い出す様になって一週間。僕は毎日一条と共に作品を書き続け、文芸作品としての構成、展開、登場人物の心理描写等、とにかく片っ端から学んだ。

今までこんなに真剣に執筆に取り組んだ事なんか無い。栗山さんの事を思うと、その気が無くてもやる気が沸き立つ。

そして翌週の土曜日、その栗山さんからメールが届いた。

第４話「鋭気隆々」

Ｆｒｏｍ：栗山梨穂子
Ｓｕｂｔｉｔｌｅ：（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
Ｔｅｘｔ：道の絵画コンクールで賞をとる事ができました。市営ホールで展示されるんだけど、見にきてくれたら嬉しいな。

（！　コンクール入賞！？）

僕は間髪入れずに返事を書いた。

Ｔｏ：栗山梨穂子
　Ｓｕｂｔｉｔｌｅ：Ｒｅ：
Ｔｅｘｔ：本当ですか！？　おめでとうございます！　絶対見にいきます！

Ｆｒｏｍ：栗山利穂子
Ｓｕｂｔｉｔｌｅ：Ｒｅ：Ｒｅ：
Ｔｅｘｔ：あっ……、忙しかったら無理しないでね？？　もし都

合が悪かったら、今度写真送るから（汗）

（可愛い……）

やっぱり、栗山さんの性格は僕にとってドストライクなんだ。僕は思わず携帯を抱きかかえた。

――翌日、僕は市営ホールへと足を運ぶ。玄関には“平成二十年度北海道絵画コンクール”という大仰な文字が佇み、このコンクールの規模の程度を僕に感じさせた。

中には割と人がいるにも関わらず雑音や雑談は殆ど無く、静かな空気だけが流れる。

一枚一枚、絵とその受賞者の名前を確認しながら奥へと進むと、緊張感ともとれる様なものがほのかに漂ってきた。

――更にもう少し進んだ広い壁、二枚の絵画に挟まれ、それはあった。

金賞『天真爛漫婦人』栗山　梨穂子

――写真が飾られているのかと錯覚するかの様な臨場感。艶やかな色遣い、柔らかなタッチ。おおよそ、真っ黒なワンピースには不釣合いな程の満面の笑みが、僕を無理矢理にでも惹き入れる。

――――――。

僕は言葉を失う。

（これが……栗山さんの……）

本当に、鳥肌が立った。握った右手には自然と力が入り、はからずも笑みが零れた。

（……図書館に行こう）

心の底から気合いが沸き立ち、僕は出口へと向かう。その途中に並ぶ他の絵になど目もくれず、栗山さんの描いたあの絵だけが頭の中を埋め尽くしていた。

――図書館を出ようとすると、長机の上の色々なコンクールのパンフレットやチラシが目に入った。吹奏楽、放送、写真――。僕は文芸コンクールのパンフレットを一部とり、ページを開く。

中には応募要綱、文芸作品の書き方、過去の受賞者など形式的な内容が並び、僕はなんとなく過去の受賞者のページを開いてみた。

平成十九年度　入選『光の道』一条　新歩

（一条!!?　まさか――!）

堂々と並ぶ入選者の名前。それは何回確認しても、一条のものだった。

（……!　そんな……）

驚きと、焦燥感と。不思議な感情が混ざり合い、それは不安として僕を包み込んだ。

＊＊＊

「あ、春原くん!」

僕が図書館に行くと、一条はもう机に向かってシャーペンを走らせていた。

（……）

僕は黙ってその正面に座る。

「今日はちょっと遅かったね。来ないかと思ったよ」

「……」

一条の言葉に返事を返す事もなく、僕は考え込んだ。

（一条……。一条も漫画家を目指してるらしいが、こいつは絵を描けるのか……?　――もし、一条も作画を担当してくれる人を探し

ているなら……。もしも一条が栗山さんに目をつけたら……）

僕が、一体栗山さんの何だと言うんだ。ただの口約束だけで繋がった、僕の作品を読んでもらった事も無い様な薄い関係。文芸コンクールに入選する様な奴も作画の担当を探しているとなったら、間違いなく栗山さんは一条を選ぶ――。

「春原くん？」

黙ったままの僕に、一条は不思議な顔をした。

「ごめん……今日は帰るよ」

「えっ……？」

「……次ここに来るのは、文芸コンクールで入選した後だ」

「……？」

一条は、戸惑った顔で僕を見ていた。

「一条……。お前には絶対に負けない」

第5話「一条の作品」

翌日。僕は図書館には向かわず、部活に出た。一条の事や栗山さんの事、少しでもシャーペンを止めると不安に胸を押し潰されそうで、僕は一心不乱に右手を動かす。

「ちょっ……ちょっと、一体どうしたの？」

持岡さんが恐る恐る僕の肩に手を置いた。

「すいません。僕、とにかく書かなきゃいけないんです」

「そ、そう……」

持岡さんは僕の肩から手を離し、後ずさりしていった。

「春原。コンクール用か？」

今度は杉長さんが僕に声を掛ける。

「……はい」

僕は右手を止めずに答えた。すると杉長さんはそれ以上何も言わず、僕もまた黙って執筆を続けた。何が何でも、一条に勝つ――。

「――なのに、なんなんだよこれ！！」

一時間後、僕は原稿用紙をグシャグシャに丸めた。誰もが一目見て分かる程の、最低最悪の出来。

（くそっ！　これじゃ一条に勝つどころか……）

僕は両肘を机につき、頭を抱えてふさぎ込んだ。

「……春原。何があったか知らんが、少し落ち着け。そんな状態で無理矢理書いてもまともな作品は書けないぞ」

杉長さんが僕の肩に右手を置く。

「すいません……。でも……」

杉長さんは少し間を置いた。

「……お前、去年入選した奴の作品を読んだ事あるのか？」

僕が一条と面識を持っている事は、そう言えばまだ誰にも話してなかった。

「……、いえ……」
　すると杉長さんは大きな机の元へ向かい、その引き出しから一つの冊子を取り出した。
「読んでみろ」
　僕の目の前に冊子を放り投げる。
「……」
　――２００７年度入選作品、『光の道』。
　非常に軽度の自閉症である山田　亮太は、自身が自閉症であるという事を周囲の人間に認識されていない。それ故に山田の姿は周囲の人間の目にはとても奇異なものとして映り、幼い頃から酷いいじめを受け続ける。
　そして山田は小学六年へと進学した時、人一人の人生を棒に振る程の異常とも呼べるいじめに遭う。筆舌に耐え難いそれは山田の心を深く傷付け、それ以来自分の部屋に引きこもる様になる。
　当然ながら友人と呼べる様な人間はおらず、無理矢理にでも『友達』というカテゴリーに何かを当てはめるならば、山田にとって唯一のそれは習慣である『読書』だった。
　しかし山田が形式上は中学校へと進学して暫く経ったある日、一度も登校しない山田の元を一人のクラスメイトが訪れる。そのクラスメイトは以後、しつこい程に山田を学校に誘い続け、山田も当初は戸惑っていたが、次第に心を開きかけていく。
　そして山田の『友達』のカテゴリーは、『読書』から『観葉植物』、『観葉植物』から『犬』、そして『犬』から『人間』へと、光の道を歩んでゆく――。
　――圧倒的だった。息をつく間も無いぐらい、美しく流れる様な文章力。読者を作品に取り込み、主人公へと感情移入させる展開、話の構成。
　これが、一条――。

呆然とする僕を見て、杉長さんが口を開いた。
「ちなみに……もしもだが、俺がこいつの作品を評価するとするならば、その時は……」
……僕らがいつも受けている、杉長さんの五段階評価。
「その時は……？」
「ほぼオール５」
――当然、そうなるだろう。僕が杉長さんでもそう評価する。
「一条の作品はほぼ完璧だ。非の打ち所が無い。奇抜にぶっ飛んだ物語という訳でなく、程々に既視感があり、程々に目新しさを含んだ展開。審査の先生方はこれぐらいのものを一番好む。そして特に高評価を得ているのが文章力と、話の構成力。どう見ても中学一年生が書く作品のレベルじゃない」
杉長さんはやってられんという様に溜息をついた。
「別に、お前はこいつに敵わんと言ってる訳じゃない。正直、お前はこれからまだまだ伸びると思っているし、今でも充分に力をつけてきている。でもだからこそ、今はじっくりと自分のペースでやるんだ。今回のコンクールでこいつに勝てなかったからって何かを失う訳じゃない、お前はお前のペースでやれば良い。それが一番、何よりもお前の為になる」
杉長さんはそう言って、優しく笑った。
「……」
――僕だって、それくらい分かってる。でも、俺は……。早くしないと、栗山さんが……。
言いようも無く、怖くなる。僕は立ち上がり、鞄を肩に掛ける。
「……すいません。今日は帰ります」
僕は振り返らず、図書館を出た。
「春原……」

第6話「正面衝突」

この日は、雨が降っていた。

僕は、学生服で頭を覆いながら少し駆け足で校門を出る。

（……！）

悔しい。一条に勝ちたいのに、一条よりも良い作品を書いてやりたいのに、いくら書いても一条には及ばない。それが、喩え様も無く悔しい。

横断歩道の信号が、赤く光る。僕は仕方なく足を止め、信号の傍の大きな木の下で雨を防いだ。

「――春原くん？」

唐突に、背中から僕を呼ぶ声。振り返るとそこには栗山さんが立っていた。

「……、栗山さん……」

どんな顔をすれば良いのか分からない。僕は思わず目を逸らした。

「今日、文芸部はお休み？」

そんな僕に気を遣う様に、栗山さんは笑顔を作る。

「あ、いや……、コンクールも近いし、今日は自分の家で書こうかなって……。今年は結構順調で、後はもう仕上げだけですし」

栗山さんが一条の方に行ってしまいそうで怖いだなんて、言えるはずもなく。目も合わせぬまま、口を震わせ僕はそう答えた。

「……ふーん」

栗山さんは、少し怪しいものを見る様な目で僕の顔を見ている。

居ても立ってもいられなくなり、信号が青く変わるのと同時に僕は道路に飛び出した。

（すいません。今は、何も言えません……。でも必ず、一条に勝って堂々と栗山さんのパートナーになります……！）

保証も出来ない約束を、心の中で勝手に交わす。重い足が水溜りを踏みしめた。

「――春原くん？」
弱々しく、僕を呼ぶ声。僕は足を止める。
「……なんですか？」
後ろを振り返りはしなかった。
「……、私は……文芸部の事は良く分からないし、漫画の原作って作業がどれ程大変な事かも全然分かってないけど……」
雨の音にかき消されながら、栗山さんの声は細々と僕の耳へと届いてくる。
「……言ったよね？　私も、ずっと漫画を描きたかった。でも、私には話を作る才能は無かったから……。だから、春原くんに声を掛けてもらった時は本当に嬉しかった」
あの日の出来事が、頭の中で蘇る。

「――私、ずっと待ってるよ。春原くんの事。春原くんが納得いくまで、ずっと待ってる。だから……、春原くんは、焦らず自分のペースで書いていて？」

「――――」
涙が零れそうで、僕は唇を強く噛み締めた。
「……ごめんなさい」
僕は振り返り、栗山さんに向かって頭を下げる。
「――正直今はまだ、僕には栗山さんの絵に相応しい程の話は書けません……」
雨が、後頭部を叩く。
「でも――いつか必ず、絶対栗山さんに追いついてみせます。栗山さんに作画を担当してもらうに相応しい原作家に、絶対なってみせます。――だからそれまで、待っててくれますか……？」
恐る恐る頭を上げると、栗山さんは満面の笑みを浮かべていた。
「もちろん！」
――雨が、晴れ上がった気がした。

僕は、全速力で家の扉を開いた。
「ちょっと……墨也、どうしたの？」
「なんでもない！」
自分の部屋の机に向かい、原稿用紙を取り出す。
（……僕に出来る事は、僕に書ける限りの作品を書く事なんだ。それが、僕に出来る唯一の作業……！）
僕はペン立ての中のシャーペンを握り、それを原稿用紙に向けた。
（一条……。僕がお前に勝てるかどうかは分からないけど、僕は持てる限りの力で作品を書く！　だから……その作品で、勝負だ、一条……！）
その日、僕は夜が更けるまで書き続けた。

＊＊＊

その時、一条は自宅にいた。
「お父さん。原稿が出来たよ」
「……見せてみなさい」
一条は父に原稿を手渡す。
（春原……、結局あれから図書館に来なかったな……）
父が一条の原稿を読んでいる間、一条は色々な考えに耽っていた。
一条はあれからも一人図書館へと通い続け、コンクールに応募する作品をほぼ完成させていた。

――『右足の軌跡』。
甲子園出場を決めた高校のエースは、大会直前に交通事故に遭い右足の骨を折る。高校生活三年目初の甲子園を直前にしての不運に、

彼はかつてない程の絶望を覚える。
　見舞いに訪れる人々との面会も断り、枕を濡らす涙も枯れきった。しかし絶望の淵で眺めたテレビの中で、チームメイト達は甲子園大会を勝ち進んでゆく。
　チームメイト達が一勝を上げる度に心境の変化を迎える彼は、その負傷した右足で色々な所を訪れる。部室のロッカールームには、彼に片想いしていたマネージャーが一人で折り続けた千羽鶴。川に投げ捨てたはずのグローブが、チームメイト達に拾われ保管されている監督室。
　甲子園大会決勝戦をその地で迎える事になる彼が、そこに辿り着く迄に辿った道筋が鮮明に描写されている作品。

「新歩」
　原稿を読み終えた父が原稿を纏める。
「ラストの文は、折角なんだから雲の動きで感情を表現しなさい。そこを変えるだけで作品全体の印象が大きく変わる」
「はい」
　一条は真剣は目つきで話に聞き入る。
「それと序盤、主人公の怪我の程度をもっと鮮明に描写しなさい。今のままでは少し分かりにくい」
「はい」
　父は一枚一枚、原稿用紙を捲りながら的を射た指摘を続ける。それは一条にとって何より為になるものであり、一条はそれを自分のものとして取り込む事で己の作品を更なるものへと昇華させていた。
（春原……。君が僕に挑むと言うのなら、僕は正面から受けて立つ！　逃げも隠れもしない、正々堂々と君に勝つ！）

第7話「卑劣な罠」

翌日、一条は部活動に出席していた。コンクール投稿用の原稿に最後の手直しを加えた後、文芸部の部長に提出する予定だ。

「……」

一条は黙って右手のシャーペンを走らせる。今回の作品『右足の軌跡』は一条にとっても自信作であり、確かな手応えがあった。こういう時は執筆も捗り、滑らかに右手が動くものだ。

一条はコンクールを純粋に楽しみに思い、自然と口元には笑みが零れた。

「チッ、一条の奴。気に食わねえ野郎だ」

……一条には聞こえない、図書室の隅の席。

「バカ。そんな事言っても仕方ねえだろ」

彼らは一条の一つ年上で、一年生の頃から受賞歴のある一条の事を良く思ってはいなかった。特に、木和（きわ）は一条に対して明らかな不快感を抱いている。

「フン、サラブレッドは気楽でいーね。生まれ持っての才能が違う」

「やめろよ。少なくとも一条は努力もしてる」

塚本は小声で木和をなだめる。

「知らねーよ。俺だって努力はしてるさ！　毎日毎日こうして部活に出て、休日も返上してるってのに！」

木和は、小声ながら口調を荒げた。

「やめろ。それは俺だって同じだ」

塚本は少し寂しそうな目をして、自分の原稿に向かう。

「……塚本お前、悔しくないのかよ」

「悔しいけど……そういうもんだろ。この世界って」

「……クソッ！」

木和は静かに床を踏みつけた。

（なんとか……なんとか、一条の奴に痛い目見せてやりてえ……）

木和は、一条の方へと視線を向ける。一条は相変わらず淡々と執筆を続けていて、その姿がまた木和の目には不愉快に写る。

（……）

しかしそんな事を知る由も無く、一条の右手のシャープペンシルは淡々と原稿用紙に文字を埋めてゆく。

（！！）

その時唐突に、木和の目が閃きに光る。

「塚本！　ちょっと耳貸せ！！」

木和は塚本の襟元を掴み、顔を口元へと強引に引き寄せた。

「なっ、なんだよ！」

木和は呟く様に、何かを塚本の耳へと囁く。

「――――」

少しして、塚本の顔が青褪めた。

「お、お前、正気かよ！！」

「ああ……。もう、あいつに痛い目見せるにはこれしか無えよ。お前もそれは充分承知してるだろ！」

「そ、それはそうだけど……いくらなんでも」

「うるせえ。チャンスは今しか無い。やるぞ」

木和は塚本を突き放した。

「ま、マジかよ……」

＊＊＊

少しして、塚本は執筆中の一条に声を掛けた。

「よ」

「あ、塚本先輩。どうしたんですか？」

一条は右手を止める。

「あー……あ、いや、なんか先生がお前の事呼んでたぞ」

「先生が？　どなたですか？」
「いや、俺も名前は知らねえけどよ、とにかく体育館でお前を探してたから」
「……？　分かりました。ありがとうございます」
そう言うと一条は立ち上がり、シャーペンを置き図書室を出て行った。
――塚本の喉が、ゴクリと鳴る。
「こ、これで良いのかよ木和！」
塚本は急いで木和の元へと戻り、小声で話し掛ける。
「ああ……完璧さ。これで俺達は一条に勝てる……！」
そう言って、木和は不敵な笑みを零した。

――数分後、一条は図書室へと戻ってきた。
（おかしいな……。もう諦めて移動しちゃったのかな）
体育館には一条の事を探している先生などおらず、一条は少しウロウロしただけで図書室へと戻ってきていた。
（まあ良いや。もう少しだ、早く原稿を完成させよう）
そう思い自分の席へと戻った一条は、机を見て顔を青褪めた。
（あ、あれ……？）
椅子を引き、筆箱を持ち上げ、何かを探す様にキョロキョロと辺りを見回す。
「どうしたの？　一条」
傍にいた三年女子が声を掛ける。一条は呆然とし、返す声も無くその場に立ち尽くした。
（無い……！！　僕の原稿が、無い！）
目の前の机には、白紙の原稿用紙と筆箱だけが寂しそうに置かれていた。
（……そんな。一体……！）
一条は机の下を覗き込んだり床に目を向けたり、失くなった原稿

用紙を探し回る。
「ちょっと、どうしたのよ一条……。何か失くしたの？」
――その時、木和が部長へと原稿用紙を差し出した。
「出来たぜ。最高傑作が」
木和は不敵に笑みを浮かべ、部長はそれを受け取る。
（！！　木和さん……！）
一条は思わず二人の元へと駆け寄り、その原稿用紙を覗き込んだ。

光陽中学校　木和　宏数『右足の軌跡』

（そんな！！　これは、僕の……！！）
それは、間違いなく一条の作品だった。一条は思わず木和の顔を見上げる。
「ん、どうした。俺の作品がどうかしたか？　そうだ、是非一条も読んでみてくれよ。今回のは自信作だぜ」
木和はそう言って不敵に笑みを浮かべ、一条の顔を見下した。
（き、木和さん……！！）
一条の表情に、衝撃と絶望が走る。
（見たか、一条！！　これが俺らがお前に勝つ唯一の方法だ！）
木和は勝利の愉悦を、その表情に漏らした。
（お前はどうする事も出来ずに、ただ指をくわえて見てるしか無いのさ！　この俺の作品がコンクールで入選する様をな！）

第8話「意地」

（諦めろ一条！　これはもう俺の作品だ！）

木和は一条を見下し、卑劣な笑みを浮かべる。

（……！！）

「どうした？　一条」

青い顔をした一条を見て、柳部長は声を掛けた。

「……い、いえ……」

一条は口を紡いだ。

（そうさ。お前が何と言おうと、これがお前の作品であるという証拠は無い！）

木和の口元が拉げる。その横で悔しさに顔を歪ませる一条を、柳は黙って見ていた。

「あ、あの！　それ、一条くんの作品です！」

（！　岡内……！！）

一条の傍で執筆を見ていた岡内が、思わず声を上げた。木和は非難の目を向ける。

「？　何の話だ？」

「とぼけないでよ！　それ一条くんが書いてた作品でしょうが！　あんた、パクったんでしょ！！」

（岡内さん……！）

「ハァ？」

木和は馬鹿馬鹿しいといった表情で、岡内を笑い飛ばした。

「言い掛かりは止せよ。これは正真正銘俺の作品だぜ」

「木和……！」

岡内は木和を睨みつけた。

「ふむ」二人のやり取りを遮る様に、柳は原稿を捲る。「どういう経緯かは知らんが、確かな証拠も無く盗作扱いするのは褒められないな」

「部長！　でも、これは一条くんが書いていた作品で……」
「だから、それでは証拠にならん。少なくとも、この原稿の文章も木和の字だしな」
柳は原稿をパラパラと捲りながら、過去の木和の原稿と字体を見比べる。
「そんな……」
岡内は落ち込み、そこで言葉を詰まらせた。
「ホラな！」木和は声を張り上げた。「分かったか！　これは正真正銘、俺の作品なんだよ！！　くだらねえ妄想もいい加減にしろ！」
「木和……」
「冗談じゃねえぜ！！　俺がどんな良作を書いても、天才の血が通ってなけりゃ盗作扱いか！？　天才の息子にしかコンクールで入賞する資格はねえってのか！！？」
木和は周囲にも聞こえる様に、わざと大きな声で叫ぶ。それは図書室全体に響き渡り、心の中で一条の才能を妬む者達を味方に引き寄せた。
「そ、そうは言ってないけど……」
岡内は言葉を失う。
「一条！！」木和は一条に言葉を投げ掛けた。「……お前が本当に天才の血筋だってんなら、書いてみろよ。これ以上の作品を」
（……！！）
「そんな！　もう締切りまでほとんど時間なんて無いのよ！？」
「書けるさ。“天才”なんだ」
木和はバカにした様に笑いながら一条を見下ろす。柳はただ黙って、その様子を見ていた。
（……！）
一条は、自分の席へと駆け出した。
「！　一条！！」
白紙の原稿用紙を並べ、シャープペンシルを右手に握る。
（……父さん、僕は……）

一条は、目を閉じた。そして大きく深呼吸してから、鋭い目つきで原稿を睨む。

（僕は……！）

右手のシャープペンシルが、原稿の上を走り出す。

「ちょっと、一条！！」

岡内は後ろから一条の左肩を掴んだ。

「やめなさいよ！　意地になってそんな事したって、いくらなんでも今から新しく書き直すなんて無理だわ！　それより私がなんとか説明するから、それまで――」

「すいません。書かせて下さい」

一条は後ろを振り返る事無く、右腕を動かし続けた。

「い、一条……」

岡内は、一条の左肩から手を離した。

（……安心しろ春原。僕はこんな事で逃げはしない！）

十分後、一条は原稿の一ページ目を書き上げた。

「何！？」

（……フン、自棄（ヤケ）になったか）

木和はその様子を遠目に眺め、馬鹿馬鹿しいと笑う。

（……。まあ、良いわ……。どれだけ無理でも、あれだけ言われてただ引き下がる訳にはいかないものね……。本来の作品は越えられなくても、意地でも作品を書き上げるつもりね）

その一条のスピードは、岡内から見ても最早投げやりになったとした思えなかった。しかし一条は周囲の目を気にする事無く、ただただ右手を動かし続ける。

（……好きなようにやらせよう。私達三年が卒業すれば自由になる……。それまで、一回限りの辛抱よ）

岡内は諦めた様に優しく微笑み、自分の席に着く。

――その時、一人の女生徒がその原稿を拾い上げた。

「……」
その女子部員は一ページ目の原稿に目を通すと、驚いた様に慌てて柳の元へとその原稿を持って行った。柳はその原稿を受け取ると、柳もまた、驚いた様に息を呑んだ。
（……？）
「ちょっと、どうしたのよ」
岡内は慌てて柳の元へと駆け寄る。
「……同じだ……」
「え？」
「この原稿、木和が提出した『右足の軌跡』と同じだ」
「え……！？」
岡内は思わず声を張り上げた。
「ちょ……ちょっと、それって一体……」
岡内は奪い取る様に柳から原稿を取り上げ、その文章に目を通す。
「おいおいおい！！」木和は立ち上がり、一条に向かって叫ぶ。「人の事パクリだなんだ言っといて、自分も人の作品の真似するのかよ！？　だが残念ながら、俺はもう提出しちまったから――」
「木和！！」
柳は木和の言葉を遮った。
「あ？」
「――少し、黙れ」
「……！？」
「部長！！　二枚目、書き上がりました」
「すぐに持って来い！！」
「は、はい！」
その女子部員は急いで駆け寄る。柳はそれを受け取ると、顔を青くしながら目を通した。
「お、おい、一体何が――」
「同じだ……」
柳は一条の原稿を木和の原稿と見比べ、呆然とする。

「……だ、だから、一条の野郎が俺の作品をパクリやがったって……」

「お前……書けるのか？　人の作品にちょっと目を通しただけで、一文一段落一字一句、何一つ違う事の無い、全く『同じ』原稿を……！」

――――あ？

木和の頬を、汗が伝う。

足先から頭へと、ゆっくりと少しずつ、各部位が緊張で固まってゆく。

その固まった首を、少しずつ少しずつ、ゆっくりと捻り、恐る恐る一条に目を向ける。

一条の右手は止まる事無く、原稿用紙の上でシャープペンシルが走り続けていた。

――木和の汗は頬を滑り、ポトリと一つ床に落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6400f/

ゲイジュツメイカーズ

2010年10月12日04時53分発行